

ヒトの情報伝達と診療情報

鈴木 荘太郎

東邦大学医療センター大森病院 院長付常勤顧問
診療情報管理士教育委員会 委員

これを読まれる皆さんは、日常業務において診療情報を取扱っている専門職として、情報に関する認識は一般人より高いと思います。日頃の仕事を離れて「人の情報」の観点から診療情報について思い浮かんだことをお話しします。

皆さんご存知のように、人は代々遺伝子を受け継いでおります。その遺伝子はアミノ酸であるアデニン (A)、グアニン (G)、チトシン (T)、シトシン (C) の塩基 (DNA) が配列したもので、2003年には全塩基配列が解明され、30億文字に及ぶ全塩基配列の情報を読み取る「ヒトゲノム解析計画」が国際的に推進されています。

先ず、自分自身の遺伝子について考えてみると、両親から一対の遺伝子を受継いでいます。両親は各々父母の遺伝子を受け継いでおりますので、代々累計しますと一代目は両親2名、二代では両親と祖父母合わせて $2 + 4 = 6$ 名となります。すなわち、受け継いだ遺伝子に関与する直系親族の人数は $2n$ の人数 (n 代) の総和になります。因みに10代遡ると、10代目は1,024名となり総数は2,048名となります。20代目には1,048,576名となり、総人数は2,097,150名を数えます。100年を約3代とすると、10代遡ると約300年、20代遡ると約600年以前の室町時代となり、当時生きていた人々から以降、現代まで生きていた人物中に、現在生きている自分に関わる遺伝子に関与する親族は200万人を超えることとなります。これは直系のみの推計ですので、兄弟姉妹の傍系を合計すると、恐らくこれより10～100倍を超える人数になる可能性があります。

日本人は島国として比較的閉鎖的な歴史を経ていきますので、1億3千万人の国民がお互いに同じ遺伝子 (DNA) を共有する確率は高いものと考えられます。

今春、「ダビンチコード」が発刊され、映画化されました。詳しい内容は皆さん個人的に確かめて頂くとして、「聖杯」とは「キリストの血を受け継いだ女性」を示しているとの仮説は、宗教を離れて考えると、もしキリストの遺髪や遺骨が存在すれば、その遺伝子を継承しているか否かが、DNA鑑定で解明できると考えられます。

また、歴史を遡れば、日本人は誰にでも平家や源氏の武将や奥方などとDNAの関与が存在する可能性があることは、霊能者で無くとも推測出来ますし、当然とも遠からずと言えます。このように、DNAレベルで考えると、人の情報は本人の意志に関わらず脈々と悠久の時代を経て伝えられており、人は一人では無いと言われる事が、DNAレベルで理解出来るのではないのでしょうか。さらに、DNAが伝わる限り、人の情報が継承されるので、人の精神の不滅、輪廻思想、生れ変わり論などの考えも納得されるのではないのでしょうか。

振返って、診療情報の伝達についてみますと、IT化により情報伝達は取扱い者が綿密、慎重に対応しなければ、情報が本来の目的と無関係に伝達され、使用されてしまう恐れがあります。情報化時代の診療情報は、人のDNAが本人の意志に関わらず歴史を超えて伝えられていると同じような状況に成りかねないと考えられ、診療情報管理に関わるシステムの構築、管理などの整備から関連する人達の倫理規範の遵守が重要な対応事項と言えます。